2023 Autumn

母校通信 152号

"Mastery for Service"

巻頭企画

～特別対談～　森学長と富田同窓会会長

新局面を迎える 関西学院の未来を語る

関西学院同窓会

特別対談

新局面を迎える関西学院の未来を語る

「原田の森に、関学未来予想図を描く」
関学発祥の地、原田の森に関学が帰ってくる、
その交渉権を手に入れた！
原田の森に関学がくるかもしれない。
そういう嬉しい情報に関して、
新しく就任された森学長と
富田同窓会会長に対談をお願いし、
過去の歴史的つながりや
これからの展望について塚本編集委員長がお話を伺った。

活動の原点となっているスクールモットー“Mastery for Service”

塚本　森康俊学長と富田順治会長にご多用の中をお集まりいただきました。まずはご自身と関西学院との関わり、学生時代のエピソードなどを交えてお話を伺いたいと思います。

富田　私は1957（S32）年に中学部に入学しました。通っていた小学校は大阪で、ほとんどの人が公立の学校に進む時代。関西学院のことは何も知りませんでした。また我が家は熱心とは言えませんが、仏教を信仰していました。仏教では「おかげさま」となんでも引き受ける心を説かれていますが、関西学院でもどの宗教も否定することなくキリスト教主義教育を行っており、まったく違和感も抵抗感もなく育ちました。どこか宗教の考えの根底で共通するところがあるのでしょう。高校に進むと、自分自身の将来や進路に向けて「自覚」を持って行動することが最も大事なことの一つであると教えられました。いわゆる放任主義で、自由であるがゆえの厳しさに驚きました。ラグビー部に所属していましたが、特に新入生の頃はきつかったですね。当時競争倍率が高かった経済学部に入りましたが、大学では部活もせず、勉強もほどほどでした（笑）。中学から通っていたので学生時代の友人はほとんどがそんな環境で育ったからか争いごとは好まない性分でした。大学卒業後は竹中工務店に入社し、勤め上げました。私の生い立ちや、人や社会の役に立ってから自分の幸せをつかむという生き方は、「奉仕のための練達」と訳されるスクールモットー“Mastery for Service”と合致していたのかなと思います。

塚本　関西学院で学んでいた間に、自然に“Mastery for Service”を体得されていたのですね。

富田　このように育んでくれた事が、私の活動の原点のような気がします。ランバス先生が神戸に着任した際、日本の庶民の様子を見て、キリスト教布教のためには人間教育が大事だと気づかれました。そうして様々な困難を越えて関西学院を創立させました。皆で力を合わせて世の中を良く導き、全員で幸せをつくるというのがランバス先生の全人教育の考えです。それを受けて、第四代院長で初代学長のベーツ先生が、「人間としての自立性と世に仕えて生きる在り方」と簡潔に表現して“Mastery for Service”という言葉を残されました。また、今日も行われているリベラルアーツ教育は、ランバス先生が目指したものの一つです。こうした関西学院の教育思想に中学生の頃に感銘を受けて、ずっと自分の心の内に在ったと思います。同期の仲間や、同窓会に関わるようになって出会った同窓生たちから、私と同じく「社会人になってから“Mastery for Service”の精神に助けられた」という話をよく聞きます。ベーツ先生が提唱されたスクールモットーは、関西学院の宝だと思います。

塚本　森康俊学長は西宮と幼いころからご縁があったそうですね。

森　小・中学生の頃、西宮北口によく来ていました。父が阪急ブレーブスのファンで、オールスターゲームなどの際に西宮球場に連れてきてもらっていたのです。私は関西学院の卒業生ではないのですが、関西学院大学も受験し、社会学部に合格していました。けっこう最近まで実家に合格通知が残っていたはずなのですが片づけてしまい、惜しいことをしたと思っています。私は30歳を過ぎて助手になり、大妻女子大学で講師をしていた頃に関西学院大学社会学部の公募があり、縁あって2003年に着任することになりました。それから20年。今年学長になり、“Mastery for Service”の精神に則って、この20年間の恩返しをしたいと思っています。

コロナ禍を越えて同窓会の変わりつつある形と変わらない存在意義

塚本　同窓会とはどのようなきっかけで関わってこられたのでしょうか。

森　コロナ禍がひと段落し、私も様々な会に顔を出してご挨拶する中、今年4月から同窓会各支部の活動が活発になっていることと感じています。

富田　そうですね。コロナ禍で活動が止まって以来3年以上のブランクがあり、一からの出直しのように感じております。私は竹中工務店に入社した

同窓会会長 富田 順治（とみた じゅんじ）

1967（S42）年経済学部卒。同年、株式会社竹中工務店に入社。2010年取締役専務執行役員就任。2015年より同窓会副会長、2023年3月同窓会会長に就任。

ところ、先輩の誘いで大阪支部に入りました。第26代の支部長を務め、同窓会支部の運営の難しさも感じました。運営費は年1回の総会の際にいただく寄付で賄っており、財政の苦しさは例年変わりません。これは全国の支部にも言えることです。同窓生が活躍し、新聞などに取り上げられて出身大学として関西学院の名前が出ると、大学のPRやブランドイメージのアップにもつながります。卒業してもずっと大学とは縁が続くものですから、今後同窓会活動を活性化させる方法を学院と一緒に考えていきたい。学院と同窓会が同じ目線で検討していくという機運が高まってほしいと思っています。そのためにも、同窓会とはそもそもどのような存在であるのか、改めて考える必要があるでしょう。

森　私の考えですが、どのような人数、規模の同窓会であっても、同窓会とは「旧交を温めること」が基本で、それをきっかけに支えあうものだと思います。大学ごとにカラーはありますが、出身でない私から見ると関西学院は、群れない気高い気風といざとなったら団結する熱い心を持っていると拝察します。そんな長所を大切にしながら、同窓会の形は現代に合わせて変えていくといいのではないでしょうか。私の専門である社会学的な視点では、〝世代〟は年齢を重ねてもずっとくっついていくものです。〝時代〟と〝世代〟と〝加齢〟はすべて別物ですが、多くの人は混同しがちです。例えば「ラジオは中高年のメディア」と言われますが、実際はラジオがおもしろかった時代に青春を過ごした人が、中高年になって再び聴取するという現象です。〝世代〟に刻まれたものは、時間が過ぎて戻ってくることがあります。同じ同窓生でも5年刻みで観察すると雰囲気が変わりますし、社会に出た数や出世の進度なども違いがあります。刻々と〝世代〟の状況は変化しており、若年層から見ると支部という小さいコミュニティは「敷居が高い」というイメージもあります。現代の若者は昔のように終の棲家が定まっておらず、地域でキャッチするのはますます難しくなるでしょう。あらゆる業界に同窓生がいる関西学院は、職域で若年層をキャッチし、生活が落ち着いた時点で支部活動に参加してもらう仕組みを考えていくのがよいのではないでしょうか。

富田　ライフサイクルの中で、いつか関西学院と自分とのつながりを考えるタイミングがやってくるはず。そのときに同窓会の存在がそばにあればうれしいと思います。

大いなる挑戦 王子公園エリアの新キャンパス設置

塚本　創立の地である王子公園跡地再整備事業における、今後の学院のビジョンについてはいかがでしょうか。

森　「王子公園再整備にかかる大学設置・運営事業者公募」に応募を決めて、優先交渉者権を得ました。神戸市との交渉を進め、9月末を目処に協定を結ぶことを目指しています。民間からの土地取得と違い、神戸市からの様々な要望をクリアしていかなければなりません。例えば、大学誘致にあたって重視された地域貢献の一環として、大学を民間に開放する考えなどに本学も賛同しています。万が一災害が起こった際は、地域の方々と助け合うことを前提としており、本学の“Mastery for Service”の精神とも合致します。どのような形で大学と市民の憩いの場とを両立させるかは、細やかに確認していく必要があると考えています。再整備計画に不安を感じている市民の方がいらっしゃることも聞いています。不安解消に必要なのは神戸市の施策への理解であり、共に神戸市へ提言することができると申し上げたいですね。

富田　この少子化の時代に、関西学院としてはかなりの挑戦だったのではないでしょうか。

森　おっしゃる通り18年後の入学者の人口が決まっている中で、大幅に規模を拡大することは現実的ではないため、新たに校地を得て定員を増やすことは思い切ったチャレンジです。大学経営をめぐる状況は楽観視できず、やはりどこかに逡巡する思いはあったと思います。しかし、西宮市上ケ原へ移転するまでキャンパスを置いていた神戸王子公園エリアへの大学誘致は、本学にとってはこの上なく魅力的な話でした。まだ先の話ではありますが、校舎は〝森〟と呼んでもらえるような自然と調和したデザインを提案しています。個人的には統一感を重視したいですね。こちらで行う教育も既存の教育構成でいいのかを考えており、既存の学部を移すだけでなく「文理融合」をコンセプトとした新学部の設立も予定しています。

富田　原田の森エリアに神戸市が大学誘致を考えているというニュースを聞いたときは、卒業生として「これは関西学院しかない！」と思いました。様々な災害に見舞われコロナ禍もあり、どこか閉塞感を感じるような世の中で、原点に戻るような話はまさに渡りに船でした。「関西学院が手を挙げないなら、どこが挙げるのか」と久しぶりに心が大きく揺さぶられましたね。同窓会としても応援の旗を上げようという心持ちでおり、おおいに期待しております。今は粛々と交渉を進めてもらい、本格的に計画が始動する際には協力できることを考えたいと思います。

20〜30年後を見据え 関西学院が生き残るためにも必要な同窓の力

森　そんなチャレンジしなくてもという意見もあり、新しいことをしようという機運が高まりにくい中、ありがたく思います。大学教育も変化し続けなければなりませんが、既存のままでは新しい展開が見出せません。国公立大学が留学生の受け入れに力を入れはじめており、私立の大学も準じることになります。本校も近隣諸国・地域からの正規留学が再開し、欧米諸国からの学生も戻ってきています。18歳人口の減少やグローバル人材育成の観点で留学生の受け入れ増加計画は注目されていますが、今後海外からの留学生がどれだけ増えるかは不透明です。現在の私たちの取り組みが、20〜30年後に関西学院が生き残れるかにつながっています。かつてたくさんの都市銀行がありましたが、今や統合されて3つのメガバンクしかありません。大学にも起こりうる可能性があると思います。競争と淘汰ですでに大学は厳しい時代を迎えており、これから難しい局面にあたるだろうと予想しています。だからこそ、本学の理念に立ち戻って考えることが必要です。創設以来変わることなく、キリスト教主義の教育、つまりキリスト教を通じて文化や世界を学ぶという教育を実践してきました。“Mastery for Service”を体現する『世界市民』を育む」というミッションステートメントは、いつの時代も私たちがなすべきことへ導いてくれます。学長に就任し、改めてその役割の難しさや重要性に直面しています。社会的期待に応える大学づくりのために、同窓の方には精神的に支えていただきたいですね。同窓生だからこその応援は大きな力になると思います。

富田　大学生、ひいては労働人口が減っていく中で、いかに期待される人間を育てるかが大学の課題となるでしょう。皆が大学を目指す時代でもなく、それぞれの進む道を考える流れになってきています。今、理系の学生が切望されていると言われていますが、今後もっと大きな視点で必要な人材について論じられるだろうと考えています。母校が生き残っていける大学であってほしいですし、できるかぎりのバックアップはしたいと思います。そのためにも、学院からももっと情報をもらって相互理解を深めていけたらと感じました。

大きな局面を迎える大学 関西学院の多様性を生かす未来を考える

森　令和7年度より私立学校法が改正されることになり、理事と評議員の兼職禁止などが法律に盛り込まれました。今後、そういった人選の推薦に同窓会の力をお借りすることが望まれる

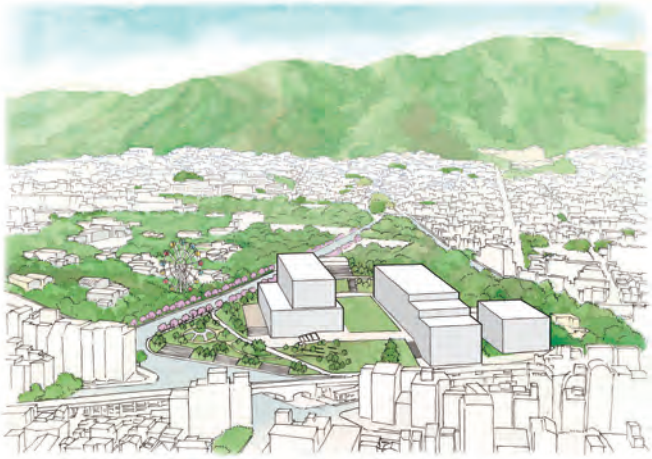
学長 森 康俊（もり やすとし）

1967(S42)年大阪府生まれ。88年上智大学外国語学部中退。93年大阪市立大学法学部卒業。99年東京大学大学院人文社会系研究科単位取得退学。東京大学社会情報研究所助手、情報学環助手、大妻女子大学社会情報学部専任講師を経て、2003年関西学院大学社会学部に着任。情報システム室副室長、社会学部副学部長、社会学部長、先端社会研究所所長を歴任。2023年4月学長に就任。体育会ゴルフ部長も務める。

のではと考えています。卒業生を網羅し、人となりを知って推薦できる組織は同窓会しかないでしょう。これまでは産業界で活躍した方が役職に就くことが多かったのですが、関西屈指の私立総合大学である本校はスポーツや芸能、文芸など様々な分野で卒業生が活躍しています。年齢、性別、職域、バックボーンなど多彩な人材から意見をもらうべきであり、そこでも関西学院の多様性が生かせるはずです。

富田　私たちも前向きに考えたいと思います。同窓会も人材の発掘は課題となっています。世代交代をスムーズに行っていきたいのですが、交代する人材が出てきていないのが現状です。しかし、全国の支部会に顔を出していると、きらりと光るものを持っている人がいるんですよ。また、海外の支部にも社会で活躍している人がたくさんいて、広い視野を持っている人が多いです。そんな同窓生にスポットを当てることにも、人材発掘のヒントがある気がしています。今後も様々な面で協力し合い手を取り合って、関西学院の発展の一助になれたらと思います。

関西学院大学 王子キャンパス



創立の地である神戸王子公園エリアへの関西学院大学新キャンパス開設を構想しています。同構想の全体コンセプトは、「自分で、みんなで。未来を起動するオープンイノベーションパーク」です。本学のミッション「“Mastery for Service（奉仕のための練達）”を体現する世界市民の育成」のもと、神戸王子公園に地域・社会・世界とシームレスにつながる緑豊かなキャンパスを創り、神戸と世界の次世代を担う人材の育成、および地域活性化への貢献を目指してまいります。

出典:「王子公園再整備基本方針」（神戸市）

150号の記念企画の続きという意味合いもあり、原田の森の歴史と未来に思いを寄せてみました。この過去があって今に続いている事を改めて実感しました。大きく広がった未来への道、それを歩いていくのは今の学生だけではなく、同窓の我々かもしれません。リカレント、学び直し、色々な道があります。どの道を選ぶかは、貴方次第。固くなってしまいがちな脳の錆を落として、生き生きライフを歩みだしてみませんか？

編集委員長　塚本 恵美子

意地がぶつかり合う 激突 真剣勝負の記録

拳法部

全員でつかんだ勝利だった。先に試合に挑んだのは女子。先鋒・箕野（商3）と中堅・石川（経4）の2連勝で関大を圧倒し、勝利を飾った。一方、男子は先鋒・田中（商2）、次鋒・山本（商4）の勝利で、幸先の良いスタートを切る。しかし後が続かず、3勝3敗で決着は大将・木下（経1）に。積極的な攻撃を仕掛け、面突きで勝負あり。「チーム力の向上を実感した」と松田主将（社4）は関関戦勝利に喜びを表した。

ヨット部

関学は470級・スナイプ級共に上位を独占し、歴史あるこの戦いで10連勝を収めた。風に恵まれた1日目。スナイプ級は全レースにて一度も首位を関大に譲らず、圧倒的な力を見せつけた。だが「詰めの甘さも見られた」と内容には改善点も。2日目はより良いレース展開で終え、最終結果は261-371。圧倒的な点差をつけて勝利をつかみ、関学体育会に貢献した。

陸上ホッケー部

男女ともに快勝で関学に軍配が上がった。まず行われた男子は、序盤に2失点と厳しい展開。だがその後、5得点を奪い逆転勝利を果たした。「すぐに切り替えることができた」とDF今中主将（社4）。一方の女子は立ち上がりから関大を圧倒した。MF岩山主将（総政4）の3得点などで6-0の勝利。「得点差をつけられて良かった」と安堵の表情を見せた。

アイスホッケー部

無念の敗北となった。試合の序盤から相手にリードを譲る展開に。だが負けられない関学。最終ピリオドでDF#20荻原（人福2）が得点に成功した。しかしその勢いに乗って追い上げることはできず、1-5で試合は終了。「継続力が足りない」とDF#85冨田主将（人福4）は振り返った。この負けを糧にさらなる成長を遂げてくれるだろう。

受け継がれる伝統 第46回総合関関戦

総合関関戦は1978年から続く関大体育会とのスポーツ対抗戦だ。昨年は15勝16敗5分で惜しくも敗北。雪辱を果たすべく第46回大会に挑んだ。前哨戦から大きく差をつけられた関学は、本戦で巻き返しを図る。白熱した戦いが繰り広げられたが、最終結果は12勝16敗7分で終えた。連敗を喫したが、来年こそは関学体育会が勝利をつかむ。

閉会式の様子

スローガン『蒼穹』

第46回総合関関戦のスローガンである「蒼穹」には歴史のある総合関関戦の意思や伝統を引き継ぎ、バトンをつないでいくという意味が込められている。このスローガンの元で、西宮・上ケ原の地を中心に白熱した戦いが繰り広げられた。

第46回総合関関戦結果

| 日程 | 前哨戦 | | |

FIGHT KWANSEI!!

輝く関学アスリートをご紹介

今春も、多くの関学アスリートが活躍を見せました。
中でも輝かしい成績を収めた９部をご紹介します。

自動車部

全速前進
走り切ったぞ

3月22日～5月28日に行われた全関西大会。団体部門にて男子がジムカーナ、女子はダートトライアル、フィギュアにて優勝した。

準硬式野球部

5月13～16日、第75回関西地区大学準硬式選手権大会にて小森大輝主将（教4）率いるチームが優勝。創部初の2連覇を達成した。

バドミントン部男子

5年ぶり
やったぞ！

5月3日～14日、令和5年度関西学生バドミントン春季リーグ戦にて優勝。5年ぶり3度目の関西制覇を達成した。

フェンシング部

4月15日～5月13日、関西学生フェンシングリーグ戦にてフルーレ部門、エペ部門を制覇。2年連続の女子総合優勝に輝いた。

サッカー部男子

7月9日、関西学生サッカー選手権大会決勝にて阪南大を1-0で撃破。7大会ぶり6度目となる夏の関西王者に輝いた。

合気道部

6月11日、第43回関西学生合気道競技大会が行われ、演武競技女子の対徒手、対武器にて優勝。男女混合では、片山（文4）・今田（商2）組が関西王者に輝いた。

卓球部

全勝優勝
しました！

4月29日～5月7日、令和5年度関西学生卓球春季リーグ戦にて、吉田主将（法4）率いる卓球部男子が優勝。3季連続、全勝で関西の頂点に立った。

洋弓部

6月17、18日、全日本アーチェリー男子王座決定戦と女子王座決定戦がそれぞれ行われ、男子が6位、女子はベスト16で幕を閉じた。

ソフトテニス部男子

西カレ連覇
最高です！

7月15日、西日本学生大学対抗ソフトテニス選手権大会にて優勝。昭和30年以来の同大会連覇となる偉業を成し遂げた。

◆ 関学スポーツとは ◆

私たち体育会学生本部編集部は、体育会唯一の広報機関です。体育会42部49パートの試合に出向いて取材を敢行し、紙面やＳＮＳアカウントにて幅広く報道を行っています。関学スポーツは1961（昭和36）年に創刊され、発行号数は2023年6月で272号を数えます（途中休刊あり）。

◆ 関学体育会のすべてはここから ◆

〈SNSアカウント〉

リアルタイムでの試合情報や結果、主将インタビューや活躍選手の号外ビラなど、様々な情報を発信中です。ぜひフォロー＆チェックのほどよろしくお願いいたします！

▲Instagram ▲Facebook ▲Twitter

NEW STAR

ニュースター降臨

Pick up!

入学直後から存在感を放った1年生を関学スポーツ独自の視点で、ピックアップしました。今後も上級生に劣らない活躍で、関学体育会を盛り上げていきます！

WATER POLO

救世主の登場だ。水上競技部水球パートの津田風音（経1）は関西インカレにて、計22得点の活躍。関学の1部リーグ昇格に貢献してみせた。津田は経験者でありながら、強豪校とは言いがたい関学に入学。「昔から憧れていた学校でプレーができてうれしい」と笑顔で話した。希望を抱くルーキーがチームの起爆剤に。彼の快進撃を見逃すな。

つだ かざと
津田 風音

2004年7月26日、大阪府生まれ。大阪府・追手門学院高出身。趣味はゲーム。経済学部1年。171㌢、63㌔。

SOCCER

1部昇格の立役者となった。MF石本千弥（商1）が、春季リーグ戦にてチーム内トップの4得点を記録。関学は見事5年ぶりとなる1部復帰を果たした。「悲願達成に貢献することができてうれしい」。持ち味は、驚異的なドリブル突破。左サイドから何度も相手DFの脅威となった。彼女の武器は関西トップレベルでも通用するのか。大型ルーキーの大舞台での挑戦が始まる。

いしもと ちひろ
石本 千弥

2005年3月10日、広島県生まれ。広島県・AICJ高出身。趣味は音楽を聴くこと。商学部1年。154㌢。

やまもと さえ
山本 紗瑛

2004年11月5日、滋賀県生まれ。滋賀県・伊吹高出身。趣味は漫画やアニメを見ること。人間福祉学部1年。163㌢。

サンダーズに欠かせない存在だ。関関戦で初ゴールを挙げたMF山本紗瑛（人福1）。貴重な得点の機会となるペナルティーコーナーでは得意のロングパスを安定して送り出し、チャンスを何度もつくる。「攻守ともに活躍できる選手になりたい」と目標を掲げる彼女。チームに貢献するという思いはプレーからも伝わってくる。秋季リーグでの活躍にも目が離せない。

FIELD HOCKEY

みよし てるひさ
三好 瑛久

2005年3月27日、兵庫県生まれ。兵庫県・関西学院高等部出身。趣味はスキー。文学部1年。166㌢、63㌔。

スーパールーキーが関学にやって来た。驚異的なスピードと安定感を兼ね備えた三好瑛久（文1）。高校時代から優秀な成績を残し、一際存在感を放っていた。この勢いは、大学生になっても止まらない。関学スピードスケートに新旋風を巻き起こし、チームの勝利に大きく貢献することだろう。まだまだ成長し続ける、彼の活躍ぶりに注目だ。

SPEED SKATE

なかにし みつき
中西 充希

2004年10月16日、兵庫県生まれ。兵庫県・報徳学園高出身。趣味は原付ツーリング。商学部1年。170㌢、71㌔。

精鋭が現れた。弓道部男子の中西充希（商1）は令和4年度新人戦にて52射中48中を射抜き、見事個人的中十傑の1位に輝く。関関戦でも先輩と肩を並べて大奮闘。抜群の集中力でチームの最前線で戦った。抜きん出た才能を発揮する中西。これらの活躍とともにチームに大きく貢献してくれるだろう。

KYUDO